

群馬県嬭恋村の耕作地周辺に生息するカモシカの土地利用

麻布大学 野生動物学研究室

朝倉 源希・南 正人

キーワード：群落選択、食物供給量、嬭恋村、ニホンカモシカ、ラジオテレメトリ

【背景・目的】

近年野生動物による農林業被害の問題が大きくなってきている。キャベツの一大産地で知られる群馬県の嬭恋村もその一つである。嬭恋村での被害を出すのはおもにニホンカモシカ (*Capricornis crispus* 以下、カモシカ) だと言われている(嬭恋村, 2010)。この対策として嬭恋村では主に防護柵の設置や個体数調整を行なっている。カモシカは国の特別天然記念物であり、このような動物の個体数調整にはその動物が出した被害状況の把握と生息状況の詳細な把握が必要である。既存研究では行動圏内が同じような土地構成でも耕作地の利用には個体差があり、耕作地を利用する個体は夜間の利用が多いと報告されているが(出口 2000; 天笠ら 1986)、実際に生息地の食物供給量と耕作地利用との関係性を調べた例はまだ少ない。そこで本研究ではキャベツ生育期間の昼夜連続した追跡調査、生息地の食物供給量の測定によって、耕作地周辺に生息するカモシカの土地利用状況と食物供給量の間を明らかにすることを目的とした。

【調査対象・方法】

調査対象は北山地区(なだらかな傾斜のカラマツ林でキャベツ畑がすぐそばにある)と門貝地区(主に落葉広葉樹林で斜面の急な谷間で斜面を上ればキャベツ畑、対岸には民家がある)の計2個体を対象に次の方法で調査を行なった。

1. ラジオテレメトリ法を用いたカモシカの行動圏・土地選択性調査

行動圏と土地利用頻度をあきらかにするために、ラジオテレメトリ法を用い、昼夜連続で約2時間おきに追跡を行った。期間は2013年5~11月の毎月4日間で合計28日であった。

2. 食物供給量の推定

調査地の食物供給量は刈り取りによって求めた。調査地の代表的な群落を選び、その中で1m×1m×1.8mの立方体区を2~6ヶ所とり、その中の植物を刈り取った。その乾燥重量を群落の単位面積当たりの食物供給量とした。

【結果・考察】

両個体の耕作地、家庭菜園や民家付近(以下、菜園)への出現回数と時間を表1、2に示した。

耕作地の選択性について、北山個体は耕作地を選択的には利用していなかった。門貝個体は耕作地を一切利用せず、菜園に現れることがあったが、選択的には利用していなかった。時間帯としては門貝の個体が夜間に多く菜園や民家付近に現れた。これらのことは両個体とも耕作地、菜園を行動圏の一部として使用するが、人との接触をできるだけ避けようとしていることが反映されていると考えられる。

群落ごとの単位面積当たりの供給量において、収穫前である夏頃のキャベツ畑が最も供給量が高かったが、北山個体の夏の行動圏内の耕作地の群落割合はそれほど高くなかった。両個体の行動圏内には、少ない月でも飼育カモシカの最大食物摂取量の16.5倍の嗜好植物が存在していた。また、耕作期間のキャベツ畑には少なくとも2段の電気柵が張られていた。これらのことから今回の調査対象が生息する耕作期間の林内には必要十分な供給量が存在しており、必ずしも耕作地を利用せざるを得ない状況ではなく、電気柵をくぐって畑に出るというコストやリスクがあればそれを避けようとする個体であると考えられる。

以上のことから耕作地付近に生息するカモシカでも耕作地を選択的に利用することのない個体が存在し、食物供給量が多いだけでは群落を選択する理由にはならないことが示唆された。

表1 北山個体の耕作地への出現時間と季節（回）

	春		夏		秋	
	耕作地	耕作地以外	耕作地	耕作地以外	耕作地	耕作地以外
日中	0	31	1	40	0	23
夜間	0	17	0	31	2	19

表2 門貝個体の家庭菜園、民家付近(以下、菜園)菜園への出現時間と季節（回）

	春		夏		秋	
	菜園	菜園以外	菜園	菜園以外	菜園	菜園以外
日中	0	30	0	40	0	24
夜間	0	20	9	21	2	22

本研究では、嬭恋村役場や嬭恋村の農業者の方、NPO 法人生物多様性研究所の御協力をいただきました。また、本研究は、京都大学野生動物センターの共同利用・共同研究のファンドの支援をいただきました。感謝致します。

【引用文献】

- 天笠敏文, 仲真悟. 1986. 防護柵内のカモシカの行動. (下北野生動物研究グループカモシカ班編: カモシカとの共存をめざして-脇野沢村ニホンカモシカ調査総合報告書-) pp. 180-187. 下北野生動物研究グループカモシカ班, 青森.
- 嬭恋村. 2010. 嬭恋村カモシカ保護管理計画. pp. 7.
- 出口善隆. 2000. 耕作地を利用するニホンカモシカの摂食行動. 東北大学大学院農学研究科環境修復生物工学専攻博士論文. pp. 136.